

今日は、降臨節第3主日です。降臨節は、イエス様の誕生を待つ、という目的と、世の終わり、神様の支配が行われる終末を待つ、という目的の、二つの目的で設定されています。イエス様の誕生は、愛にあふれた姿が頭に浮かび、世の終わりについては、厳しい審判のイメージがあります。そして、今日の福音書は、どちらかと言うと、厳しい審判を強調する、洗礼者ヨハネのことばが前面に出てきています。

降臨節の4本のローソクについては、教区報にも書きましたが、第1は、イスラエルの父祖たちへの「約束のローソク」。第2は、救い主が現れると予告した「預言者のローソク」。そして今日、降臨節第3主日は「洗礼者ヨハネのローソク」ということで、イエス様の誕生が近いことも語っていますが、同時に当時のユダヤ人たちへの悔い改めを訴えているのです。ついでに言えば、第4主日は、イエス様を産んだ「マリアのローソク」ということになります。

それで、今日は洗礼者ヨハネのことを学ぶことになるわけですが、洗礼者ヨハネと言えば、すぐに思いつくのが、ヨルダン川で洗礼を授けている場面です。

ユダヤ教にも洗礼というのはありました。ただし、それはユダヤ人にはする必要はない、と思われていました。ユダヤ人は、神様から選ばれた民族ですから、生まれて8日目に男の子なら割礼を施し、神殿にささげものをしていけば、洗礼など必要ではない。必要なのは、外国人がユダヤ教の信徒になるための手続きとしての洗礼でした。神様から選ばれていない人々が、自らユダヤ教徒になろうとするなら、その汚れを洗い清めなければならない、ということで、洗礼を受けてユダヤ教の仲間に入ったのです。

しかし、ユダヤ人だって神様に逆らい、間違った道を歩いてきたことは、旧約聖書の歴史を見れば明らかです。それで、ヨハネは、ユダヤ人にも洗礼が必要である、ということを教えるために、悔い改めの洗礼を施していたのです。

今日の福音書では、ヨハネは彼の話を知っているユダヤ人群衆に対して、「そんな、自分たちが優れた民族だという誇りを捨てて、悔い改めることが大切だ」ということをたびたび強調しています。

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。」というわけです。

つまり、『自分たちが優れている、という優越感など捨ててしまえ。お前たちだって、悔い改めて、新しい生き方をしなければ、やがて来られるメシアによって、捨てられて、もみ殻か、切られた木のように焼き捨てられるぞ。』そんな意味が込められているのでしょう。

ですから、間違っているのにそれを認めず、悔い改めない人々のことを、自分の後に来るメシアが、厳しく、火によって滅ぼすような裁きをされるだろうと、ヨハネは考えていました。

ところが、彼の予想は外れた、と言いましょうか。ヨハネの目から見たら、あのヨルダン川で洗礼を受けたイエス様は、彼の期待したような裁きの行動をとってくれないのです。やがて、ヨハネは逮捕されて、牢屋に入れられます。そんな状態の中で、彼はイエス様が本当にメシアなのかどうか、確かめたくて、ヨハネは自分の弟子たちをイエス様のもとへ遣わして質問させたことがありました。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方をまたなければなりませんか。」

この質問に対してイエス様は、「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」(ルカ7:22~23)という答えでした。これは、イザヤ書35章で、イスラエルの栄光が回復した時の姿を語ったものです。社会の中で苦勞している人々が報われる世界こそが、救い主がもたらす世界だということでしょう。それは苦しみから解放されること、とも言えるでしょう。

私も今日は、ヨハネの言う、8節の『悔い改めにふさわしい実を結べ。』ということを考えてみたいと思います。ヨハネは自分なりに、救い主を迎えるための準備として、悔い改めにふさわしい生活をするように、群衆や徴税人や兵士たちに勧めています。わたしたちが今目指すことは、イエス様が理想とされたイザヤ書の姿を、あたかも今救い主が来たかのように、生活することではないか、と私は思うのです。

目の見えない人、足の不自由な人、病気の人が、あたかもそんなことが苦しみとは思わないような、喜んでいる姿。それが、天国と、それを先取りするような教会に求められていることだと私は思います。

私は宮崎で牧師をしている時に、2か月に1回、宮崎市内の牧師たちが集まって、だいたい毎回10人から12人くらいが顔を合わせ、会場になった教会の牧師が説教したり、担当を決めて学習会をしたりしています。そして各教会の情報交換にも使っていて、私は映画が好きなので、最近見た映画の話とか、イースターの日程を決めるのに、実は私たちの理解より、実際の決め方は、複雑で、しかし面白いものなどと、自分の最近学んだことなどを紹介したりしていました。

ところが、ある牧師さんは、最近教会に付けた音響設備の話をしてくださいました。高齢で説教の声が良く聞こえない信徒が二人ほど礼拝に来ておられるのですが、ワイアレスヘッドフォンという器具をつけて、マイクを通して牧師の話を聞けば、よく聞こえたのでしょうか。90歳を超えた人が喜んで説教を聞いている、ということでした。

私はまだそこまでやる行動力はありませんが、前に宗像に居た時、テレビの音声を近くでよく聞き取れる「みみもとくん」という機械は手に入れて、信徒の方の所で設置したことがありました。また、延岡へ行った時、DVDを簡単に見ることができる、ポータブルDVDプレーヤーを見せましたが、翌日、宮崎で老人ホームに入っている人に、それを持って行って、見てもらうことにしました。

それと直接は関係ありませんが、私は宮崎に住むようになってから、日曜日の説教は礼拝の前に受付に置いておくし、鹿児島では私の原稿を朝持ってゆくと印刷してくばってくださいました。

延岡では私が印刷したものを持ってゆくようにしました。このようなことは、神学校の説教では全く学ばなかったし、どちらかという、原稿にとらわれずに、会衆に向かって語りかけなさい、というのが教育の方針だったと思います。しかし、神学校を出て30年以上過ぎて、信徒の人々が高齢になると、学校で学んだことが、今そのまま通用するとは思わなくなりました。会衆に向かって語りかけても、聞き取れない人たちがいる、という新しい状況なのです。

それに加えて、コロナウイルスが蔓延して、礼拝に参加できない人や、教会自身も礼拝を取りやめるという事態にもなりました。

説教について、先日教役者会で、最近説教の研修を受けた人の話を聞きました。その報告文書の最初に、「説教を成り立たせるもの」として、第1に、「会衆」 「説教の特徴は、それが不特定ではなく、具体的な人々に向けて、多くは神の言葉を聞きに教会に集まっている人々のために語る言葉であること。」となっていました。

教会の礼拝や説教というのは、ずっと受け継がれてきたものですが、時代によって、また、相手によって、やり方を変えて、相手にふさわしい形を模索してゆく必要があろうと感じています。それが、悔い改めにふさわしい実を結ぶということにつながるのではないかと。

そして、各教会での説教は、その場限りの、聞きっぱなしで、家に帰ったら、今日の説教は何だったのか、覚えていない、という話も聞いたことがあります。

今日の福音書には、悔い改めを迫った、洗礼者ヨハネが登場しますが、「悔い改めにふさわしい実を結べ、」と言ったヨハネの言葉を、私たちが積極的に受け入れて、教会の礼拝や説教、習慣などが変わって行って、集まる人々が、いろんな困難から解放されてゆくことを目指したいと思います。

それが、救い主を待ち望むときに、あたかも救い主が今来ているかのように生きる生き方だと思うのです。